

井上 隆史 (いのうえ たかし)

東京藝術大学教授

元NHKエグゼクティブプロデューサー

経歴

1952年 香川県丸亀市生まれ

1976年 早稲田大学法学部卒業

1976年 NHK(日本放送協会)入局

1981年 NHK放送センター番組制作局ディレクター

1990年 同 チーフプロデューサー

1993年 同 編成局スペシャル番組部チーフプロデューサー

1998年 同 番組制作局チーフプロデューサー

2000年 (株)NHKエンタープライズ21文化番組担当部長

2006年 NHK放送センター放送総局エグゼクティブプロデューサー

*2002年~2007年 総合地球環境学研究所客員教授を兼務——研究テーマ「シルクロードの環境と文明」

現在 東京藝術大学ユーラシア文化交流センター教授(副センター長)



2005年4月

シルクロード調査・楼蘭小河墓にて

専攻・バックグラウンド シルクロードの文明史・テレビドキュメンタリー制作

主な番組 「絵巻切断〜秘宝三十六歌仙の流転」 「大モンゴル」シリーズ

「中国12億人の改革開放」シリーズ 「家族の肖像」シリーズ

「四大文明」シリーズ 「新シルクロード」シリーズ

メッセージ

アフガニスタンはギリシャ・ペルシャ・インドなど様々な文明が混じり合った独特の文化を育みました。文明の十字路口であると同時にシルクロード交易の要衝であったアフガニスタンの文化遺産は、20年以上に及ぶ内戦と紛争で、破壊され、盗まれ、その多くが失われたのです。

タリバンによるバーミヤンの大仏爆破は、世界に衝撃を与え、今日のISなどのテロリストによる文化遺産の破壊などの蛮行に繋がったともいえます。

われわれ日本の古代文化にも、シルクロードを通じて大きな影響を与えたアフガニスタンの歴史と未来を見つめていきます。

東京藝術大学ユーラシア文化交流センター
井上隆史 教授



2015年7月より、東京藝術大学はユーラシア全体の文化遺産の保護・修復・複製制作・遺産活用に関する事業を実施するべく、新たに「ユーラシア文化交流センター」を設立した。センター運営に携わる井上隆史客員教授に、センター設立の目的と今春に開催したアフガニスタン特別企画展について話を伺った。

文化外交・交流の基幹へ
ユーラシア文化交流センター設立

ユーラシア文化交流センターは、東京藝術大学社会連携の一環として、ユーラシアの文化遺産の保護や修復、複製制作、遺産活用などの国際的ネットワークの役割を担うため、昨年7月に発足しました。

戦禍や劣化などで失われてゆく文化財の保護や修復を望む国々に対し、日本が保存修復の技術力で応えていく重要性を切に感じています。当センターの拠点となる東京藝術大学には、日本を代表するデジタル技術や文化財修復スキルがあります。露大が今まで培ってきた技能と最先端技術を活用し、「文化」で世界に貢献する事業が大いに期待されています。

日本画家で東京藝術大学元学長を歴任された故平山郁夫先生やシルクロードを巡る取材に同行した際に伺った話を思い出します。教授が外交を担む機会を作ってしまったとしても「文化」によってその壁は越えて行けるものではないかと平山先生は常々語っていました。

もちろん、外交を行う上で日本政府が強い姿勢を示すことも時には必要です。しかし、その一方で、連携保護などの文化的交流で結ばれた関係を育むことは、国家間の緊張関係を解かれたとき、大きな役割を担うはずだと。

アフガニスタンを知って下さい
そして忘れないで下さい

平成28年4月12日から6月19日まで東京藝術大学 陳列館で「アフガニスタン特別企画展 パーミヤン大仏天井壁画—流出文化財とともに—」を開催しました。1階には保護された壁画の一部と解説映像、アフガニスタン アイ・ハラムの遺物 セクスの左足をもち、露大で修復されたセクスの胸部までの像などを、2階では、アフガニスタンで撮影した壁画映像、音響鑑賞やパズルの展示を行いました。来場者からはメッセージ性が高く、印象に残る展示であったなど温かい感想を寄せられており、とてもうれしく思います。

以前アフガニスタンから学生を招き、日本の学生とディベートを行う事業に参画したことがありました。ディベートの中でアフガニスタンの学生が語った「アフガニスタンを知ってください。そして忘れないで下さい」という言葉がとても印象的でした。このアフガニスタン特別展をきっかけに、多くの来場者がアフガニスタンの現状や将来への関心を深めてもらいたいと願っています。

展示会場2階に展示されていた洞窟天上壁画には、風神が描かれています。風神というモチーフは、横谷宗達によっても描かれてきたように、古来から日本人の間でも親しまれてきたが、その起源はギリシャにあると考えられています。日本へは、シルクロードを渡って伝えられたと考えられますが、その中間地点にアフガニスタンを位置していました。

15年前(2001年)この洞窟天上壁画はタリバンによって破壊されました。展示作品は、宮廻正明研究リーダーのもと、COI拠点文化共有研究グループが可能な限り詳細な複製制作に挑んだ力作です。

洞窟天上壁画復元に活かされた
15,000点の写真データ

かつて文化財の保護とは、受け継がれてきた遺跡や文化財そのものを継承していくことに重点が置かれていましたが、今はそれも難しくなっています。

文化財を後世へ残し伝えたいという願いは、テロリストには残念ながら届きません。このような情勢下において、写真やバーチャルな文化財の記録を残しておくことは急務とされているのです。

アフガニスタン特別展で展示した洞窟天上壁画の復元には、京都大学人文科学研究所に保管されている15,000点の高精細デジタルデータ(画像)の存在が欠かせませんでした。この天井壁画の画像写真データは、1970年代に京都大学植口謙康先生の調査団によって撮影・保管されていたもので、画素数の多い現在のデジタル画像に比べて、さらに細かい描写を再現できたであろうと見えます。

これらの写真データの記録をもとに、露大が有する3D最先端技術、そして文化財や仏像修復などで培ってきた伝統的な復元技術の結集が今回の「洞窟天上壁画復元」作品でもあります。露大の持つこれらの技術は、文化財保護事業として大いに期待されているのです。

一方で、露大も今以上に社会へ成果を発信していく必要があります。民間ではなく、大学であるからこそできる事業が進み、さらにはステータスを上げていく必要性を強く感じています。

修復対象を日本で修復後、
返却する病院の機関をめざして

日本では2006年「海外の文化遺産の保護に係る国際的な協力の推進に関する法律」が施行されました。しかし現状では、海外からの文化財修復の要請に迅速に対応しきれない場面でも、多面で行う保存事業において遅れを取る場合が少なくありません。日本が誇る技術を活かすためにも、修復が求められる文化財を日本で修復したのち、故郷国へ返却する拠点となる病院の機関の設立が求められています。

文化遺産保存分野における日本の技術の国際的認知度を高め、国際協力の場から日本が後進することの無いようにするためにも、ユーラシア文化交流センターが推進していくことを願っています。

マスターデジタル博物館長陳列会
(アフガニスタン特別企画展会場)



東京藝術大学
COI拠点



5月26日、G7伊勢志摩サミットのサイドイベント「テロと文化財—テロリストによる文化財破壊—不正取引へのカウンターメッセージ」にて、露大COI拠点制作の高精細複製壁画「クローン文化財」(複製されたパーミヤン大仏天井壁画「クローン文化財」(複製されたパーミヤン大仏天井壁画第6号壁)の2点)が展示され、宮廻正明RLからG7首脳へクローン文化財について解説をおこなった。

安倍総理大臣からは、文化財の破壊は全人類の歴史、文化を破壊する行為であり、断じて許されない。不正取引はテロリストが自らの資金源にしている可能性があるとも指摘されている。この問題には、インターポールの盗難美術品データベースの更なる活用を含む政府間や国際機関を適した協力に加え、美術品を扱う民間関係者からの協力が必要である旨発言した。

オランド仏大統領からは文化財等の不正取引対策、文化財をテロリストの手に渡らせないための美術館への一時保管所の提供や緊急事態における文化財の保存計画の策定、遺跡の記憶の保存等の両国の取り組みや関連国際会議の開催提案について旨言があった。

G7伊勢志摩サミットにて
クローン文化財を展示



(上)クローン文化財の意義について
G7首脳へ説明する宮廻正明RL
(下)クローン文化財を触って、真贋を
確かめるG7首脳